
 PREFACE

LIFE IS LONG, ART IS LONG

高石 哲 男



私達少年の頃 “Life is short, art is long.” と教えられた。ところが、この頃の研究論文を見ていると、“Life is short, art is short.” と叫んでいる様に感じられる。ある面白い現象を捉えると、short note, letter, シンポジウムの proceedings と矢継ぎ早やに同一人が4, 5報出す。文献を調べる側は、物凄い進展があるものと期待して、一聯の短報を読み進むと、猿がらっきょうの皮をむいて怒る様な気分になる。論文のスタイルだけではない。40才そこそこで研究の現場から離れてしまう。会社の研究者の場合、本人の意志ではどうにもならないことも知れないが、大学の研究者は自分の意志で定年まで研究にしがみつかる筈である。私が今の大学に移る際、学長に面接を受けた。その時、「私は40才を過ぎて、良い研究をして〇〇賞を受賞しようなどと努力するのは、悪いとは思わないが、高くは評価しない。40才を過ぎたら、オルガナイザーとして皆のために役立つべきだ。」と聞いて、工学系と理学系の相違に驚歎した。これは極端な例かも知れないが、余りにも研究実働寿命が短い。自ら命を縮めることはないではないか。

(life, art) と (long, short) の組合せは4つあるから、もう2つある。昔、私が北大の某研究所の助手の頃、学問的に超保守の所長と対立抗争してカッカッしていた時、故小林秋男教授が「なあ高石君、Life is long, art is short だよ」と逆説的に宥められて、なる程ねえと思った。

同じ小林門下の川路紳治君(学習院大, 物理, 教授)は、昭和34年頃から半導体表面近傍におけるバンドの曲りを測り、MITのGatos教授のところに留学した。帰って来た時、これから何をやるのか尋ねたら、同じテーマを続けると言う。FETが今日の如く作られるとは考えもつかない頃だから、大した問題でもなさそうなのに、気の長い人だと思った。あれから20数年、倦まずたゆまず研究を続行し、2次元バンドの分野で大成した。何となく網を張っていたら、FETという大魚が飛び込んで来た、という運の良さもあるが、矢張り研究態度の正しさが成功の主因である。これこそ、“Life is long, art is long.”の御手本だと思う。

(豊橋技術科学大学)